第1講：110「魂は生き通し」

おやさと研究所長
永尾　教昭　*Noriaki Nagao*

「魂」とは

人間は心、身体、そして魂で構成される存在ではないだろうか。

おさしづに「人間というものは、身はかりもの、心一つが我がのもの」（明治22年2月14日）とある。つまり身体は神からの借り物であるが、心は我のもの、自分のものということだ。言葉を変えると、身体は自分の思い通りにはならないが、心は自由に使えるということだろう。

「心一つが我のもの」ということは、「心」は所有物であり、「我れ」が所有者ということになる。この「我れ」、つまり人間の根源的なもの、それが魂ではないだろうか。

心理学者の河合隼雄は、「物と心の切断からもれてきたもの」（『宗教と科学の接点』岩波現代文庫、21頁）と述べている。つまり、物でも心でもないもので、はっきりと認識できないが人間を構成する何かが魂ではないかということであろう。

死、つまり出直して再び生まれ変わるとは、心が継続するのではなく、魂が継続しそれに新たな身体を借りてこの世に帰ってくるのだろう。

原典には唯一、「おふでさき」に一例だけ、「たましい」が出てくる。（「おさしづ」にも一例だけ魂の語が出てくるが、それは諺の引用であり、教理上魂に触れている部分はない。）

高山にくらしているもたにそこに
くらしているもをなしたまひい（十三号45）

その二首のちに

それしらすみなにんけんの心でわ
なんどたかびくあるとをもふて（同47）

と歌われていることからも、上のお歌は「人間の魂に貴賤の差はない」という意味であろう。個々人の能力などの違いで社会的立場に違いはあるが、人間の本質的なものに決して差はないということであろう。

生まれ変わり

教祖ご自身が「生まれ変わり」と述べておられる例や、「おさしづ」で生まれ変わりを説いておられる例がいくつかある。

「おふでさき」では、中山たまへ初代真柱夫人の出生に関して、

このたびのはらみているをうちなるわ
なんとをもふてまちているやら
このもとハ六ねんいぜんに三月の
十五日よりむかいとりたで（七号65、67）
なわたまへはやくみたいとをもうなら
月日をしへるてゑをしいかり（同72）

と、この度宿ったのは6年前の明治3年3月15日に出直した秀が、たまへとして生まれ変わってくるのだと教えられている。この秀という方は、秀司とおやそという女性の間に嘉永6年に生まれた女児である。

「おさしづ」で、人物を特定して生まれ変わりを述べられているのは三例である。

サヨ生まれてより、60日目経ちて、身上障りに付願い

「親が子となり、子が親となり、名を呼び出せ。一時名を呼び出さねば分かろうまい。さあ〳〵生れ更わりたで。名ははる。」（M21年4月16日）とサヨの祖母である山澤はる（教祖の次女）が生まれ変わってきたと教えられている。

永尾たつゑ身の障りに付願い

「さあ〳〵若き処の、さあ〳〵母の母、三代先の母」（明治21年8月30日）と永尾たつゑは三代前の母の生れ変りと教えられる。

「三十年三十四五年しゅ〳〵しゅは、しゅ〳〵の親々、母の母、しゅ母母の理」（明治31年4月29日　山澤ミキノ以前七箇年の間に知らすとおさしづありしに付、今年十才になりますので前おさしづに基づき願）と、先に述べた秀司の庶子である秀の祖母の生まれ変りであると述べられている。

ただし、同じ「おさしづ」で「後々誰の生まれ更わりと言えば世界大変。…誰がどう、彼がどう、とは言わん」と生まれ変わりを説き出すと世界中が大変なことになるから、誰が誰に生まれ変わっているかは今後明らかにしないとも教えられている。本来、人間が知るべきことではないのかも知れない。

教祖ご自身が生まれ変わりと述べられている例が三例ある。慶応二年はるが身籠った際、「今度、おはるには、前川の父の魂を宿し込んだ。しんばしらの真之亮やで」とはるに宿っているのは、教祖の実父の魂の生まれ変わりで、将来初代真柱になる中山真之亮であると述べておられる。さらに、「先に長男亮蔵として生まれさせたが、長男のため親の思いが掛って、貰い受ける事が出来なかったので、一旦迎え取り、今度は三男として同じ魂を生まれさせた」と述べられる。つまり教祖の実父の魂が、一旦、梶本惣治郎、はる夫妻の長男として生まれ、夭折した後、再び三男として生まれてきて、中山家に養子として入り初代真柱となる。

また逸話篇の中で、上田ナライトに対し「待ってた、待ってた。五代前に命のすたるところを救けてくれた叔母やで」と五代前の教祖の叔母であったと述べておられる。

本逸話について

本逸話の時期、秀司とこかんはそれぞれ出直しているが、教祖はその魂と話しておられるとも読み取れる。この話は明治15年頃と推測されるが、その20数年後に誕生する中山正善2代真柱とその姉中山玉千代の誕生も予言されている。

これをどう悟るか難しい問題であるが、「おふでさき」に

そのうちになかやまうぢとゆうやしき
にんけんはじめどふくみへるで
このどふぐいざなぎいゝといざなみと
くにさづちいと月よみとなり（十一号70、71）

とあるように、人間初め出しの道具のいんねんある魂の方々は、永遠に中山家に生まれ変わっていくということを教えられているとも考えられる。

そのことは、秀司出直し直後に、秀司に代わって教祖の口を通して「私は、何処へも行きません。魂は親に抱かれて居るで。古着を脱ぎ捨てたまでやで。」（『稿本天理教教祖伝』152頁）と述べておられることからも明らかであろう。続いて「元初まりの道具衆の魂は、いついつ迄も元のやしきに留まり、生れ更り出更りして、一列たすけの上に働いて居られる」とも述べられている。